

トランプ関税に脅されて さらに高まる 食の安全性のリスク



鈴木宣弘

東京大学大学院 特任教授

すずき・のぶひろ／1958年三重県生まれ。東京大学農学部卒業後、農林水産省入省。農業総合研究所研究交流科長、九州大学教授などを経て、2006年から東京大学大学院教授。2024年4月から現職。食料安全保障推進財団理事長。専門は農業経済学、国際貿易論。『農業消滅 農政の失敗がまねく国家存亡の危機』（平凡社新書）、『協同組合と農業経済 共生システムの経済理論』（東京大学出版会）ほか著書多数。

トランプ関税に伴う日米合意の結果、食の安全性に関するリスクも高まる可能性がある。国民の命と暮らしを支える食と農を、けっして犠牲にしてはいけない。今回は、輸入農産物に伴う食の安全性をめぐる問題を振り返りながら、整理してみる。

■「危ないものは日本へ」の構造

遺伝子組み換えでない国産大豆で作った non-GMO 豆腐ですよという表示が一昨年から消された。日本で non-GMO 表示をされると、消費者が間違えて安全な遺伝子組み換えを不安に思ってしまう。誤認表示だからやめろという米国からの要求に応えたのだ。

除草剤ラウンドアップについては、主成分のグリホサートの発がん性などが問題になって、世界中で基準が厳しくなっている。世界で厳しくなると日本人が食べていい基準だけ、そばで150倍とか小麦で6倍とかに緩められた。

さらに、ラウンドアップは日本では農家は雑草にかけるが、米国などでは、これを大豆・トウモロコシ・小麦に直接かけている。それを世界で一人当たり1番多く、輸入食品から直接食べてしまっているのが日本人の悲劇だ。

ゲノム編集についても、米国から審査もするな、表示もするな、と要請されて、

日本は野放しにした。しかし米国発のゲノムトマトの販売会社は、日本人も心配するだろうから、どうするか。今、全国の小学校にゲノムトマトの苗を無償配布して、子どもが育てたおいしいゲノムトマトを、給食で、おうちで食べようねと、日本の子どもを実験台にした新しいビジネスモデルかのように国際セミナーで発表した。まさに実験台だ。そうやって日本の子どもたちから広げて、儲かるのは特許を持っている米国のグローバル種子農薬企業だ。

果物や穀物も海外から船で運んでくるときは、日本では禁止されている収穫後の防カビ剤をかけざるを得ない。発がん性がある。だから日本は米国のレモンを海に捨てたが、米国の逆鱗に触れて、「自動車を止めるぞ」と言われ、禁止農薬を食品添加物に分類変更した。こうして我々は危ない果物や穀物を食べ続けている。

それから牛肉については、エストロゲンという女性ホルモンが乳がんの増殖因子ということで、日本では牛や豚の飼育には禁止だが、米国などでは使っているので、日本は輸入肉の検査をザルにした。オーストラリアも喜んで、禁止のEUで売るときは使わないが、日本向けには使ってきている。今や世界の合言葉は「危ないものは日本へ」なのだ。産婦人科の学会誌にも米国の肉から600倍のエストロゲンが出てきて、日本におけるホルモン剤の増加と関係あると発表された。

■ トランプ関税に脅されて増える輸入農産物のリスク

「令和の米騒動」への対応では、稲作農家を支えて生産振興する対策は出されずに生産現場の不安を放置したまま、備蓄米も使い果たし、次は輸入しかないというストーリーがつくられていたかに見える。

トランプ大統領に、もっとコメを輸入しろと言われ、自動車を守るにはコメを出すしかないかのように、譲ってはならない最後のカードであるコメまでが差し出されるストーリーだ。まさに、「盗人に追い銭」外交を展開してしまった。



当初から、MA (ミニマム・アクセス)の輸入枠、77万トンのうち約半分の35万トン前後はアメリカから必ず買うと「密約」していたのは関係者間では「公然の秘密」だったが、その「密約」を何と60万トンにまで拡大されてしまったのだ。

それだけでなく、米価高騰によって、MA 米の枠外でも、341円/kgの「禁止的関税」を払っても輸入米が日本国内で3,500円/5kg前後で販売できるため、すでに輸入米が増加している。「カリフォルニアのカルローズ米はお手頃な値段で味もまずまず」と言っている人もいる。

しかし、輸入米には、船で運んでくるときに、日本では禁止の収穫後農薬の防カビ剤などがかけられている。加えて、防カビ剤をかけていても、発がん性の高いアフラトキシンというカビ毒が結構検出されている。こうしたリスクも消費者は認識しないといけない。

さらに、第一次トランプ政権では、中国がアメリカとの約束を反故にした300万トンのトウモロコシまで「尻拭い」で買わされた。日本側は、「尻拭い」とは国内向けには言えないので、蛾の幼虫の被害のためにトウモロコシを追加購入しないといけなくなったと虚偽の説明をして処理しきれないトウモロコシの追加輸入を発表した。

今回は、最初から、トウモロコシに加えて大豆も「尻拭い」で買うことを認めている。「遺伝子組み換え+除草剤+防カビ剤」のトウモロコシと大豆の一層の輸入拡大は消費者の健康リスクを高めるし、国産トウモロコシや大豆の増産にも水を差すことにもなる。日本は大豆もトウモロコシも、アメリカ産より割安なブラジル産の輸入を増やしつつあったが、アメリカ産に逆戻りで、価格も高くつくことになる。

こうした問題もトランプ関税をめぐる日米合意に関して考えておかねばならないのである。